寛永諸家譜

清和源氏庚八冊之内
義光流之内 武田流

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (41)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

内藤
朱倉
栗原
大井
仁科
駒井

寛永諸家系圖傳

清和源氏　庚五

義光流

内藤

若列　武田代　廣流

義光四代

信義

武田太郎　後河寺

浅草文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

信光

武田五郎　伊豆守　石和五郎と号す

信時

五郎次郎　伊豆守

時綱

六郎

信政

小五郎

信宗

孫六

信武

長六　伊豆守

将軍号武衛りつる

氏信

治部少輔　伊豆守　後ハ修理とあらそむ

鹿苑院殿ゟ偏諱

信在

治部少輔　伊豆守

信守

治部少輔　伊豆守

子なきゆへ家督と中信繁に譲る

信繁

治部少輔　伊豆守

勝定院殿なりしより蒼庵院殿へ仕る

信栄

長九郎　治部少輔　若狭守護

蒼庵院殿よりの子なきゆへ末子孫

信賢

治部少輔　大膳大夫　陸奥守

蒼庵院殿へ仕る

子なきゆへ又末子孫

國信

喜太郎　治部少輔　大膳大夫

慈照院殿　常徳院殿ヲ法名

信親

喜太郎　治部少輔

父ハ光信

元信

喜次郎　伊豆守　大膳大夫

元光

喜次郎　伊豆守　大膳大夫

慈照院殿法名　慈林院殿　万松院殿

ヲ法名

信豊

喜二郎　伊豆守

義統

信由　　信京

元次

壹二郎　大膳大夫

三郎　上総介

壹五郎　右衛門佐

孫八郎

信重

豊臣秀吉はしゝあかかろがさ

壹五郎　宮内少輔

系

内蔵内義助

常ゝ歌道とこのみく京紙と申す

若列て信長

家伝小いく元光るありと云ども

て許宣ぜずある人竟と芸育をひと

なほ多くは内裏と称せ代々
若列侯となり武田の郎党となる

重政

筑前守　若列天下に城を
築おき一揆蜂起を信長を恐
代に重政若列に無くして
り給ふ

直則

伊賀守

直義

長庫

直為

弥左衛門尉

之實

八左衛門尉

政高

筑前守

秀吉代討若列没落する人 政高浪人となる

亲

筑後守

忠治

元能

右助

三郎左衛門

長縄

大義 生國若列

若列乱後丹羽五郎左衛門長秀の孫左

衛門となる人是より姓名をあらためて

権理兵衛と号し度々戦場におゝ軍

功あり長秀感状をたゞく

是長元年四月十九日城列ゟ死去

四十五歳 法名見性

長教

信長卿　生涯若列
東照大権現かつ〳〵祖父政秀と云
めさまるかもち寛永十九年九月廿二日
石出さまてくゝ相渡一書
大坂夏陣御陣中ゝ信長
家信秋舊記若列沒落の時紛失
もく志のしども先祖ちゝ信秋太刀長教
いまに是を正相とく

長冨

八幡　生國相列
寛永六年六月十日
将軍家を拝し一書

長武

信之亟

重純

石見守

政貞

又十郎　法名京湖　母ハ逸見氏

為別当乱の後浪人となり京都に住

政宗

山三郎

政猪

新十郎　宮内少輔

豊臣秀頼より法名

慶長十九年大坂籠城の時政勝与力

三十騎を引くに戦功あり秀頼より検使

織田右門後茂又高清両陣を巡見して

政猪の事を秀頼より尋ねられ

て別陣を津場と定め与力二十騎也

あげ為に部合五十騎也

聖寿年大坂再乱の時五月六日改修本村
長門守屋敷にて五カ五十騎と引わく
矢尾九郎兵衛と討死仕り

二十一案

直信

修善寺
初八東福寺僧なり
元和六年初て江戸江召
出軍家と共に御お供仕

寛永四年
忠修宅まで還俗し修善寺と号を付
忠勝刀脇指とさげ土井大炊頭利勝
稲葉丹後守正勝を又刀なしび鑓を
持ふ
同六年下総国内の内にて知行とた
下り
家紋七葉下り笹九の裏に内乃字

国立公文書館
National Archives of Japan

内藤

家傳小いたく甲列武田代流なり

正重

源助　生国甲斐

武田信玄に仕えうけたまわり出されなく

東照大権現につえなり

正次

源左衛門　生國同所

大指現

名流流殿より使之者

正総

源左衛門　生國後河

名流流殿

羽軍家より使之者　俸八百五十石

右頭書

家紋上羽の丸

国立公文書館
National Archives of Japan

米倉

宗継

丹後守　生國甲州武川

武田代々に仕ふる

天正三年五月長篠合戰乃時討死

忠継

主計助　生母同お

国立公文書館
National Archives of Japan

天正十年三月勝頼生害し甲列没
落のとき信長ゟふれ令とゝぐ甲
列浪人をめしゆるす禁制のゝ
申ゟ出ひろうた
東照大権現成瀬吉右衛門ゟ命じて甲列
市川ゟおめく忠継とめ出され甲列
桐山へ下りゟ申ゟ向ゟ参きた
ゟ　鈎命と申ゟふれゟ枝地ゟ
なるゝ

同年六月信長自殺ゟ小条氏亡
甲列をとゝゟ
大権現忠継を桐山ゟめされく　作ゟ
甲列へなるゝ計策とめぐらす参き
ゟ　命とゝゟ甲列ゟ殺向し武川
の矢ども御旗下ゟ屬し御家殺ゟ
御先へ人数を指こと氏直が士卒
小沼ゟたてごゝゟと進散し郷功とゝ
きんづるゆへ御直判ゟ御書と下さる

御三家御別家被仰出候名目
相渡候ハヽ抽忠信ハ
七月十五日　家康　御判
米倉主殿助殿
彦坂
大権現嘉義へ諸士とさ〻ハ
池田いゝ〻主殿人として書る後
府へ来る之よりわ又御出判ハ御書と
結髪
髪結人ハ中越ノ京之名を池田
美濃ハ名ハ兄弟親類後列美濃越前二
ハ庭寔感悦ハ殊去秋去ハ真田表
万事入情之通ノ旨大久保七郎右衛門
被露ハ之又之悦喜ハ細毎人ハ
ハ〻ハ
正月十三日　家康　御判
武川庄中

天正十八年関東御入国ノ時供奉小姓
一戒刑鉢形ヨリ忍城七百五十石
領知す
慶長四年四月病死ス時ニ五十六歳
法名珠元

信継

六郎左衛門　母浅野
天正十年甲州御入国の時信継ハ
弱冠御忠節ヲ以テ召出サル
大権現ヘ召出サル
天正十八年関東御入国の時供奉ス
別ニ相別ヨリ新地ヲ拝領ス
信継實ハ京継ガ子ナリ兄忠継子ナキ
ヨリ別ニ信継ヲ養子ス忠
継死シテ家督ヲ信継ニ給ハ
リ御使番ニ役ヲ勤ム主後
大権現ノ命ヨリテ父ガ名ヲ改メ

毋後ちとあらしむる
右法院殿は伏見大坂城より
おわします御金堂御堂となる
為軍家は御同じ御役を勤む
寛永十三年四月病死八十九法名道心

永時

助右衛門　生母同お
天正六年

大稙現をはします大御書を勤む
右法院殿より
為軍家よりいらるまく御代官となる
寛永元年二月死す時に五十五歳
法名道普

重種

平度　生母同お
天正八年
大稙現をはします大御書を勤む

名濃院殿
将軍家より度々御代参を勤む

種勝

理大夫　生母武蔵
寛永七年　鈞命よりて大御番
となる
同九年御切米を給ふ
同十年御加増を給はりて大夫

御切米を初めよりつめ取る

義継

忠右衛門　生母甲州
文禄元年
名濃院殿として大御番を勤む
元和元年五月七日大坂合戦のとき
討死時より廿七歳　法名宗義

改継

助右衛門　生国武蔵

永時が跡を継ぐ

寛永八年　大御番となる

上友

庄右衛門　生国同前

初軍家へ仕らへなる

寛ハ柳澤庄右衛門　長久がるなり永時

長久ハ上友が伯母聟也

豊継

右大史　生国同前

武田信玄勝頼父子より二人数度軍功有

天正十年小条氏直甲州へとうしまる

大權現御先手へ人数をさしむけらるる

時武川の軍士よりり小沼れ小屋と改

屋敷ゑるれ伊東三右衛門米倉重

なるびよ豊継等三人首級とるく

大指現れ御陣甲列に新府人衆と然ど
伊東二左衛門なるべし小豊継小条家も
乃兄二人を討死少御感なるめなるべ
して四頭の地を給る
同十二年小牧陣同十三年真田陣に家
功をそげまし
然ど無二の忠節を抜き武川衆と
同じく御直判の御書をたまる
同十八年小田原陣より従事
同年武列新府に帰おく新地を給る
しびくれ軍功あり少御書乃出
とかくかくの領地を取給
同十九年九郎御陣より従事
又長五年関ヶ原出陣に
石徳院殿より真田御陣ふお
もむく
元和元年甲列の門まく本領を給ら
甲府に城の御番を勤む

同年大坂注陣乃時
大御所様ゟ御城番を頼
被仰付候ハ大坂表へ出張仕
大坂ゟ御帰城と申候城とり
ゟ明と申入戸野又兵衛と申候
奉行と
寛永四年病死時ゟ七十八歳法名
日秋

西継

戸大夫　生国同前
元和元年大坂ゟ御帰
大御所様ゟ浅野内匠頭様
同三年
元和元年大坂ゟ御帰
寛永十年

為軍家を洛し奉るに依り方々を
同十七年八月沖蔵の書を勤む

満継

加賀御門　生国甲州
武田信玄勝頼父子に仕へ家功あり
天正十年武川衆小沼小屋と
せめ破ぶり小糸方れものを討ち数多
軍功あるにより
大権現御願を蒙る事八豊継が伝ふ有り
同十八年小田原沖陣より供奉
同年武州鉢形おゐて領地を給ひ
軍労あるゆへ御書をゆるされ領地より
居住
同十九年九部陣より供奉
慶長五年
台徳院殿より忠ひ真田沖陣おゐ
むく

同八年甲州より おわく衆と称し甲府
乃城の御書を用ひむ
同十九年元和元年大坂夏の陣より
偕年寿
同八年病死時 六十八歳 法名日継

信継

如春清門 生國武蔵
元和元年 大坂より おわく

大檀現と称し奉り御扶持方を給る
同三年 後別よりむき忠長卿ふつふ
寛永十年
将軍家と称し奉り御扶持方を給ふ
同十七年 八月御義代書を勤む

家紋割菱

信友

柳沢靱負　生國甲斐　柳沢と又源氏也

武田信玄ゟつゝく上別前の城ゟ

おのゝく討死

安倍

兵部　生國同所

天正十年

大将現ゟ任久しくまゐる

長久

庄左衛門

病あるにより下ゟ任ぬ

国立公文書館
National Archives of Japan

栗原

信成

次郎　刑部大輔　甲斐國乃与護

武田太郎信義八代の孫

武續

十郎　栗原乃元祖　生國甲州

国立公文書館
National Archives of Japan

信通
出羽守

信明
出羽守

信遠
民部少輔

信友
伊豆守

信重
伊豆守

信方
半五郎

国立公文書館
National Archives of Japan

信頼

伊豆守

政長

日向守　生国甲斐

天正十年甲州没落の後

東照大権現と御一味申候処

甲州長坂の郷と申候て武州横山

よりおのく病死　法名道参

忠重

大学助　生国同前

忠重代より四領とあるゝ武

州児玉郡　用土村乃内同国横山郷

共ゝ五百石此地とゝ

ゝ横山とあゝあて下総国

香取郡小菅村乃ゝ成相領

慶長五年　関原御陣のゝ

大權現の御年号なり

同七年江戸より病死時より五十七歳

法名紙覓

清次

忠長卿　生國武蔵

元和七年大坂御供を勤む

同年六月廿日病死時より三十五歳

法名順性

忠正

又右衛門　生國同所

忠正四歳の時　釣命より父清次が

遺跡を継ぐ

寛永八年

将軍家に御目見する

同十年より御供を勤む

家紋割菱

国立公文書館
National Archives of Japan

大井

武田太郎信義六代の後裔なり
世系図河窪乃次第と相違代事あり
といへども志ばらく家伝とのす

信忠

武田五三郎

信安

小五郎

信時

五郎次郎

信綱

五郎二郎

時綱

六郎

信ふ

孫六　清淨真院と号す

信武

彦六　雪深照公

信成
刑部大輔　雪窓継統院と号す

氏清
伊豆守

系
大井陸奥守

公信
薩摩守

為猶
信濃守　陸奥大史

系
上野介　剃髪して玄鉄斎と号す　生国
甲斐　法名唐高

武田信虎ガ聞ナル先祖ヨリ代々別
而親ヲ頼和ス

虎昌

監物　因幡守　生国同前　勝頼ヨツフ
天正七年十二月十日病死八十一歳
一渓宗義ト号ス

昌次

庄兵衛　生国同前
河窪与右衛門　後ハ大久保石見守ト
ハ後列ル　おかるく
東照大権現（石出さる孔雀　喜雲全悦
慶長十五年六十五歳ノ病死法名

昌義

長右衛門　生国同前

慶長十二年七月十七日大坂以利勝奉
を以て
石清水院殿を洛陽に

昌輝

理心院　生國武蔵
寛永十三年
将軍家へ召出され御目見

家紋割菱

国立公文書館
National Archives of Japan

仁科

武田の末流

信道

勘右衛門

服部玄蕃組ニ属シ御歩ニ出ル

勤ム 元後 鈞命ニ付テ撰別ニ付

御義ニ成ル

寛永十一年病死

信勝

勅を受

将軍家小性となりて父信道が遺跡を

継ぎ渉切米なるべし小技拵方を相願ふ

家紋割菱

駒井

新羅三郎義光六世乃孫伊豫守

信政が三男信盛駒井の郷に住して

駒井と称ス乞駒井氏祖なり

●政武

高白斧　唐立と号ス　生国甲斐

家伝ニいハく信盛十一代の後裔なり

政忠

右京　生國同前

武田信玄より攻入て小累沢源沢

乃城より落る

甲州没落の後

東照大権現より攻入られ

天正十一年閏正月十四日領地を給

御朱印あり

文禄四年五十四歳家督病死　法名

金可

親直

右京　生國同前

石徳院殿より攻入られ

慶長十九年元和元年大坂陣より

供奉して敵を

を洛領をうけ御使番となる

寛永八年四月十五日病死法名宗節

親昌

右京　生國武蔵

元和六年三月二日初めて

台徳院殿へ御目見

寛永七年十月廿八日御小姓となる

台徳院殿へ仕へ奉る

同九年正月二日御書院番と勤む

家紋割菱丸柳

国立公文書館
National Archives of Japan

駒井

信為

筑後　生國甲斐

武田信虎信玄父子ヲ仕ル

系

肥前　生國同前

甲州穂坂寺の城代

系

宮内　信濃同お

勝英

肥前　生國同お　但し同お

昌長

宮内　次郎　右衛門　但し同お

武田信玄勝頼父子より仕えて甲州没落の後

東照大権現より仕えまする

天正十二年　長久手よりおかく首級を

同十八年小田原陣の時岩付城へ殺

向して歌を討とりて首を切て後

名護屋殿へ仕えまする病あるにより つ

を謝して元年よりおよびまく休居す
七十九歳にして病死　法名　鈍之

冨保

次郎左衛門尉
名德院殿へ仕へ奉り
大坂陣の働き一番級を取り
寛永十五年中風にかゝりて五十五歳
にして死す

長俊

清左衛門
名德院殿
將軍家に仕へ奉る

長保

孫七郎
寛永十三年
將軍家へ召出され御謁を

同十五年より御書を勤む

昌信

次郎右衛門

寛永二年

将軍家より御書を勤む

同四年御小姓組に御書を勤む

同九年　鈞命により御書院番となる

家紋割菱丸に柳

国立公文書館
National Archives of Japan

勝盛

第刃　生国甲斐

駒井

武田伊豫守信政が二男信盛が後
裔なると信玄より列に甲列駒井
乃庄と領地を見てもて駒井と
称號せ

武田信玄より仕ふ
天正十年石州出陣
大権現より使ひとして来り
七十二歳にして病死

勝正

右近　生国同所
大権現を祝し奉る
文禄四年豫正伏見城番を勤む

勝重

時より石州にて病死　歳五十三

勝重

孫四郎　生国同所
慶長四年
大権現を祝し奉る翌年
名濃院殿へ仕へ奉る
同年武田陣の時勝重供奉仕る後大
坂より赴き出小姓組となる

御供仕候浪人となる
大坂表へ御陣と勤むる故元和八年
石出される
名濃殿殿より召しかゝえられる
寛永元年
将軍家を許しをる

勝定
太郎左衛門　生國武蔵

寛永七年
将軍家を許しをる
家紋割菱井桁

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan